

ただうなずいて見せたひと

川端康成「伊豆の踊子」の語用論的分析

高本 條 治*
(平成8年10月31日受理)

要 旨

川端康成「伊豆の踊子」の中に、表現として顕現していない主格動作主の解釈が曖昧な文がある。この解釈事例には、結束性と一貫性の双方が関わっている。小論では、結束性・一貫性という言語学用語について確認的な概観をした上で、関連性理論の枠組みに基づいてこの事例の分析を行う。分析にあたっては、川端自身がその文の解釈について書き残しているエッセイを利用する。分析を通じて、結束性解釈が語彙統語構造から受ける強い制約、結束性解釈と一貫性解釈との連携性、結束性解釈と一貫性解釈の衝突などの問題を議論する。

KEY WORDS

cohesion	結束性	coherence	一貫性
relevance	関連性	ambiguity	曖昧性

1. 「伊豆の踊子」に見られる解釈上の問題点

川端康成「伊豆の踊子」の終章、下田港の乗船場で「私」が「踊子」と別れる場面に、次のような一節がある¹⁾。

(1) はしけはひどく揺れた。踊子はやはり臀をきつと閉ぢたまま一方を見つめてみた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなずいて見せた。はしけが帰つて行つた。(pp.322-3)

下線部分には、主格動作主(いわゆる主語)が明記されていない。それをどう解釈すればよいかについて、わざわざ注記を行っているのが、次のa・bである。

(2)a. さよならを言はうとした この動作の主格は踊子。(長谷川泉による注。『日本近代文学大系』42, 角川書店, 1972年, p.114)

b. さよならを言おうとしたが、……うなずいてみせた 踊子の動作である。(『高等学校新選現代国語一 指導資料』, 尚学図書, 1972年, pp.493-4)

もちろん、主格動作主が明記されていない箇所は「伊豆の踊子」の中だけでも相当数にのぼる。例えば、(1)の少し前に、次のような一節がある。

(3) 乗船場に近づくと、海際にうづくまつてゐる踊子の姿が私の胸に飛び込んだ。傍に行くまで彼女はじつとしてゐた。黙つて頭を下げた。昨夜のままの化粧が私を一層感情的にし

* 言語系教育講座

た。眈の紅が怒つてゐるかのやうな顔に幼い凛々しさを与へてゐた。(p.321)

下線をつけた3カ所には、いずれも主格動作主が明記されていない。だが、(2)a・bの資料を見ても、これらの箇所には注は施されていない。ことさら(1)の下線部についてのみ、わざわざ注記が行われているのである。このことは、(1)の下線部が、解釈上の問題箇所であるということを示している。

この部分の解釈問題を最も端的に示しているのは、サイデンステッカー (E. G. Seidensticker) による英訳 (*The Izu Dancer*) である。(1)に相当する部分を、サイデンステッカーは、次のように翻訳している²⁾。

(4) The lighter pitched violently. The dancer started fixedly ahead, her lips pressed tight together. As I started up the rope ladder to the ship I looked back. I wanted to say good-bye, but I only nodded again. The lighter pulled off. (pp.62-4)

下線部には、'I wanted to say good-bye', 'I only nodded again' というように主格動作主が 'I' で明記されている。「私」が主格動作主であると想定されているわけである。ところが、後述するように、主格動作主を「私」とする解釈は、作者川端康成が意図した解釈とは異なっている。その意味では、(2)aの補注(p.440)で長谷川泉が述べているように、これは「誤訳」ということになる。

この(1)の下線部に関する解釈問題は、小論のテーマである「結束性」や「一貫性」の問題と深く関係している。まず次節では、結束性と一貫性という用語について確認的に述べ、その後で、再び、川端康成自身の分析に基づきながら、この解釈事例を検討することにした。

2. 「結束性」と「一貫性」の区別

2-1 「結束性 (cohesion)」

発話形式に表現として顕現していない情報を、文脈³⁾から得られる情報を手がかりにして推論的に想定することは、日常的な発話解釈の際にもごく普通に行われていることである。統語的には結合されていない構成素間(特徴的には、文境界や節境界を超えた構成素間)に、意味解的的な依存関係が想定された結果として、意味のつながりが顕在化する特性を、言語学では一般に「結束性 (cohesion)」と呼んでいる。

'cohesion' という用語は、形態論・語構成論においても使用されるが、文境界や節境界を超えた意味の依存関係という意味で広く使われるようになったのは、Halliday and Hasan (1976) の影響力によるところが大きい。そこでは、結束性は「テキスト性 (texture)」（テキストをまさにテキストたらしめている特性)の実現のあり方の一つである⁴⁾とされ、次のように結束性が定義づけられている (Halliday and Hasan 1976: 4)。

(5) 結束性は、談話内の何らかの要素についての「解釈」が他の要素の解釈に依存している場合に生じる。それに頼らないと効果的にコード解読できないという意味で、一方が他方を「前提」としているのである。このとき、結束的な関係が生じ、それによって2つの要素、すなわち、前提にする側と前提にされる側とが、一つのテキストの中に統合される(少なくとも、その可能性がある)。

2-2 「一貫性 (coherence)」

結束性は、「一貫性 (coherence)」と対比して使用されることが少なくない⁵⁾。例えば、Crystal (1991: 60-1) では、「cohesion」の項目で、

- (6) [結束性は] 文中の異なった部分や談話内のより大きな単位を結びつけるような、発話やテキストの表層構造特性のことをいう。(……) テキストの潜在的な (underlying) 一貫性という概念とは区別されるのがふつうである。

と述べ、また、「coherence」の項目でも、

- (7) [一貫性は] 話しことばや書きことばのひとまとまり (テキスト、談話) について、その潜在的で機能的な結合性や同一性 (connectedness or identity) を説明するために措定される、組織化の中心原理のことをいう。(……) こういう文脈では、一貫性は、表層構造レベルの分析での統語的・意味的な連結性 (connectivity) のことを指す結束性と対比されるのが普通である。

と述べて、結束性と一貫性を対比させている。

このように、結束性と一貫性という用語については、相互に区別しながら対比的に使おうとされる傾向が強い。しかし、必ずしも、それぞれの概念規定のしかたや、両者の区別のしかたが十分に共有されているとは言い難い面もある。そのため、用語上の混乱に陥った症例をしばしば見かけたり、自分自身でもその混乱に陥ったりすることがある。

2-3 用語上の問題点

そもそも英語でも「cohesion」と「coherence」の区別は難しいようで、Wales (1989: 73) は次のように指摘している。

- (8) 「coherence」と「cohesion」は、談話分析やテキスト言語学において著名な用語であるが、区別するのは難しい⁶⁾。

訳語にも問題がある。「cohesion」=「結束性」、「coherence」=「一貫性」という訳語の当て方は、かなり定着してきていると見られる。例えば、『小学館ランダムハウス英和大辞典第2版』(小学館、1994年)では、「cohesion」の第4項に、言語学用語として「結束性(作用)」という訳語を掲げ、「coherence」の第5項に、やはり言語学用語として「一貫性」という訳語を掲げている⁷⁾。また、『言語学大辞典 第6巻(術語編)』(三省堂、1996年)では、どちらも見出しとしては掲げられていないが、巻末索引において、「cohesion」に対しては「結束作用、結束性」、「coherence」に対しては「一貫性、首尾一貫性」というように、それぞれ複数の訳語が当てられている。索引によって検索可能な範囲では、「cohesion」については7例中5例が「結束性」を、「coherence」については3例中2例が「一貫性」を使用している。

しかし、困ったことに、「結束性」という訳語が「coherence」の方に当てられることもある。例えば、Beaugrande and Dressler (1981) の邦訳書(『テキスト言語学入門』、紀伊國屋書店)では、「cohesion」が「結束構造」、「coherence」が「結束性」と訳されている⁸⁾。Beaugrande and Dressler (1981: 13) の注5に対する訳文は、次の通りである。

- (9) <結束性>は、<結束構造>ということと混同されたり、一緒にされたりすることが多かった。しかし表層における関係性と基底にある内容における関係性とは区別する必要がある。

(訳書: 19)

「表層における関係性」は<結束構造>のことを言っており、「基底にある内容における関係

性」は〈結束性〉のことを言っている。前文における〈結束性〉、〈結束構造〉という出現順序が、ここで逆転していることもあって、かなり注意深く読まないで誤解が生じる。その他では、Sperber and Wilson (1986) の邦訳書である『関連性理論—伝達と認知』(研究社出版)でも、‘cohesion’ = 「結束構造」、‘coherence’ = 「結束性」という訳語の当て方が踏襲されている⁹⁾。

言語学において‘cohesion’と‘coherence’が、互いに区別されながら広く使用されているのは事実である。そのことは、小型の言語学用語辞典においても、この2語が別々の見出しとして立項されていることからわかる(Crystal 1991, Crystal 1992, Richards et al. 1992, Carter 1993, Bussmann 1996)。しかし、どうやら、英語においても日本語においても、‘cohesion’と‘coherence’、「結束性」と「一貫性」は、直観のないしは慣習的な区別の難しさを乗り越えて使用せざるをえないようである¹⁰⁾。

2-4 結束性・一貫性・関連性

ところで、結束性と一貫性について、Sperber and Wilson (1986: 263) は、次のように述べている。

(10) 結束性と一貫性は派生範疇であり、最終的には関連性から導き出されるものだということができる。

この見方は、関連性理論の枠組みの中では、ごく自然に得られる帰結の一つである。一貫性に関する理論が関連性理論の部分的な派生であるという議論は、Brass (1990: 72-4) がより積極的に進めている。そこでは、関連性の原理に従った解釈が行われている場合には、おのずから一貫性も保証されているという見方が提示されている。

関連性理論では、発話の理解過程を「表意 (explicature)」解釈の過程と「推意 (implicature)」解釈の過程に分け、表意を、コード解読の結果得られる論理形式を発展させた解釈成果であると見る¹¹⁾。このような枠組みでは、結束性は、表意解釈の過程で発生する、関連性の原則に従った解釈的特性の一つであると位置づけられる。

結束性と一貫性が、関連性という概念の中に包括的に取り込まれるのであれば、両者の厳密な区別があまり本質的な問題ではなくなるばかりか、結束性と一貫性が連続していたり、分離できなかったりするような事例に対しても、矛盾のない処理が行えるようになるはずである。

3. 結束性の実現と解釈に関する事例

3-1 結束性を実現する仕組み

ここで、最初に掲出した(1)の解釈問題に立ち返ろう。(1)の下線部を含む文、すなわち、「私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。」という文の表意解釈には、解釈上、表現として顕現していない主格動作主を想定することが必要である。既に見たとおり、(4)の英訳では、主格動作主が‘I’で明記されていた。主格動作主として「私」が想定されていたわけである。「私」は、(1)の下線部を含む文の中にも先行位置に表現されているが、「伊豆の踊子」冒頭第1文¹²⁾から、語り手として継続的に表現に現れている。したがって、(1)の下線部の主格動作主として「私」を想定するとき、意味解釈的な依存関係が節境界や文境界を超えて生じることになり、結束性が顕在化する。

サイデンステッカーによる英訳の(4)の下線部 (I wanted to say good-bye, but I only nodded again.) においては、(1)の下線部では明記されていなかった主格動作主 'I' が、2カ所にわたって明記されていた。川端による原文とサイデンステッカーによる訳文とで、主格動作主の表示のしかたに差があることは、日本語と英語との語彙統語規則の差によるものと見てよいであろう。結束性が、語彙統語構造を契機としてもたらされるものである以上、結束性の実現のしかたは、当然、日本語と英語とでは異なったものとなる。結束性の実現のしかたが言語変種ごとに異なっているという見方は、Halliday and Hasan (1976: 5) にも見られる。

(11) 結束性は、ある言語の体系の一部である。結束性の可能性は、指示、省略など、言語そのものに組み込まれた体系的資源によってもたらされる。

この指摘は、日本語における結束性実現の仕組みを研究する場合には、それが日本語の語彙統語規則の体系と分離できない関係にあるという自覚が必要であることを示してくれている。

3-2 結束性の実現とその解釈

先に(3)として引用した部分を再掲する。

(12) 乗船場に近づくと、海際にうづくまつてゐる踊子の姿が私の胸に飛び込んだ。傍に行くまで彼女はじつとしてゐた。黙つて頭を下げた。昨夜のままの化粧が私を一層感情的にした。眦の紅が怒つてゐるかのやうな顔に幼い凛々しさを与へてゐた。(p.321)

この部分を、サイデンステッカーは次のように英訳している。下線は(12)と対応している。

(13) As we came to the pier I saw with a quick jump of the heart that the little dancer was sitting at the water's edge. She did not move as we came up, only nodded a silent greeting. On her face were the traces of make-up I found so engaging, and the rather angry red at the corner of her eyes seemed to give her a fresh young dignity. (p.62)

原文の「乗船場に近づくと」に相当する第一の下線部、「傍に行くまで」に相当する第二の下線部には、主格動作主としていずれも 'we' が表現されている。この 'we' の指示対象は、「踊子」と旅をともししている芸人「栄吉」と「私」の二人である。しかし、「乗船場に近づく」・「傍に行く」の主格動作主が、「栄吉」と「私」の二人であるという情報は、(12)の表現範囲からは得られない。前後のコテキスト (cotext) ¹³⁾を参照する必要がある。

まず、(12)の直前には、まもなく出立する「私」を見送るために「栄吉」が宿に迎えに来る場面が語られている。

(14) 私は烏打帽を脱いで栄吉の頭にかぶせてやつた。そしてカバンの中から学校の制帽を出して皺を伸ばしながら、二人で笑つた。

また、(12)の直後には、「栄吉」と「踊子」のやりとりが描かれている。

(15) 栄吉が言つた。

「外の者も来るのか。」

踊子は首を振つた。

したがって、(13)が第一・第二の下線部において、「栄吉」を含めた 'we' という主格動作主を明記しているのは妥当な解釈であり、(14)→(12)→(15)というひとつながりの表現における一貫性を反映した解釈になっている。

3-3 結束性の実現と一貫性解釈

次に、(13)の第三の下線部を見てみよう。原文の「黙つて頭を下げた。」という文に相当する部分であるが、下線部には、主格動作主は明記されていない。しかし、原文では独立した文として表現されているにも関わらず、訳文では、直前の文と併合することによって、既に明記された‘She’という主格動作主を統語的に共有する手段が採られている。「黙つて頭を下げた」のが「踊子」の動作であることは統語的に明示されているわけである。

ただし、「傍に行くまで彼女はじつとしてみた。黙つて頭を下げた。」という川端の原文の場合にも、「彼女」という主格動作主を共有する手段が採られているとする見方もある。例えば、三上章（1960：117-29）には、助詞「は」の「ピリオド越え」という問題が論じられている。「ピリオド越え」とは、「『Xハ』がピリオド（マル、句点）を超えて、次々の文まで及んで行く」（p.117）ことである。三上の用語を使うと、原文「黙つて頭を下げた。」は、「前文の題目におんぶして、その一文としては題目の言表を欠く」（p.119）という特性をもつ文、すなわち、「略題」の文である。このとき、「前文の提題『Xハ』にピリオドを超える底力」（p.119）があるため、「前文や前々文の題目が響きつづけ」（p.123）るとするのが三上の見方である。

仮にこのような見方をとるならば、日本語において主題化の助詞「は」は、結束性の実現手段として機能することになる。また、当然のことながら、文における主題表示は、連文¹⁴⁾における主題表示と関係し、ひいては、テキスト全体の主題¹⁵⁾とも関係するはずである。国語学における「文章論」分野の研究では、「は」によって提示される主題表現を、一貫性の指標として利用することによって、文の主題表示の問題を、文章や段落の一貫性解釈の問題につなげようというアプローチが少なくない。

4. 川端康成による結束性分析の事例

4-1 「うなづく」という動詞の反復使用

再び、(1)の下線部をどのように解釈するかという問題に立ち戻ろう。この問題については、川端康成自身が著した『『伊豆の踊子』の作者』に言及がある¹⁶⁾。その中で、川端は、ここで「うなづいた」のが「私」か「踊子」かという質問を、中学の国語教師などから幾度も受けたということに触れ、続けて次のように述べている。

(16) はじめ、私はこの質問が思ひがけなかつた。踊子にきまつてゐるではないか。この港の別れの情感からも、踊子がうなづくのでなければならぬ。この場の「私」と踊子との様子からしても、踊子であるのは明らかではないか。「私」か踊子かと疑つたり迷つたりするのは、読みが足りないのではなからうか。(p.223)

川端にしてみれば、確かに「読みが足りないのではなからうか」と主張したくなるだけの根拠があった。それは、この作品における「うなづく」という動詞の反復使用である。(1)の少し前の場面で、次のように、「うなづく」という動詞が2回使用されている¹⁷⁾。

(17) 栄吉が言つた。

「外の者も来るのか。」

踊子は首を振つた。

「皆まだ寝てゐるのか。」

踊子はうなづいた。

栄吉が船の切符とはしけ券とを買いに行つた間に、私はいろいろ話しかけて見たが、踊子は堀割が海に入るところをじつと見下したまま一言も言はなかつた。私の言葉が終らない先き終らない先きに、何度となくこくりこくりうなづいて見せるだけだつた。(pp. 321-2)

川端は、自分自身の表現意図を、次のように三度にわたって繰り返している。

- (18) a. 「もう一ぺんただうなづいて見せた。」で、「もう一ぺん」とわざわざ書いたのは、その前に、踊子がうなづいたことを書いてゐるからである。(p.223)
- b. 踊子がうなづいたと、こんな風に二度書いてゐる。それを受けて、「もう一ぺんただうなづいて見せた。」と書いたのである。(p.224)
- c. 前に二度「うなづく」と書いたので、照応のつもりもあつて、ここでもう一度「うなづく」と書いたのである。(p.227)

「うなづく」という動詞の反復使用という事実は確かに重要であるが、あわせて、aに指摘されている「もう一ぺん」という表現の働きが大切である。「もう一ぺんただうなづいて見せた」という動作をした主体は、それまでに何度か(少なくとも一度は)「うなづく」という動作をしているはずである。「もう一ぺん」は、そのような叙述上の前提を必要とするがゆえに、表意解釈に必要な推論を一定方向に動機づける。すなわち、「うなづいて見せた」の主格動作主としては、「うなづく」という動作をしたことのある人物が強く期待される。あとは、読み手が利用可能な文脈想定の中に、(17)の解釈成果が正当にパッケージ化されているかどうかだけが問題となる。

4-2 従属句内の「私が」のスコープ

当初は、読者の「読みが足りないのではなからうか」という印象をもっていた川端も、責任を読み手だけに押しつけることはできないと気づく。彼は、次のように述べている。

- (19) ところがしかし、読者の質問の手紙にうながされて、疑問の箇所を読んでみると、その文章だけをよく読んでみると、「私」か踊子かと迷へば迷ふのがもつともだと、私ははじめて気がついた。「私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。」では、「さよならを言はうとした」のも、「うなづいた」のも、「私」と取られるのが、むしろ自然かもしれない。しかしそれなら、「私が」ではなくて「私は」としさうである。「私が」の「が」は、「さよならを言はうとした」のが、私とは別人の踊子であること、踊子という主格が省略されてゐることを暗に感じさせないだらうか。(p.224)

下線部の「しかしそれなら」より前の部分は、表現それ自体が曖昧性をもっていることを、自ら公式に認めた部分である。別の部分では、「踊子といふ主格を省略したために、読者をまどはせるあいまいな文章となつた」(p.224)とも述べている。さらに、「英訳者のサイデンステツカア氏も『私』としてゐる」(p.224)ことに触れ、(4)に引用したサイデンステッカーによる英訳を引用した上で、次のように謙虚な感想を述べる。

- (20) 翻訳の場合とか学習の場合とかは、一語一語をゆるがせにしないで確かめてゆき、もちろん、主格のあやふやなどはゆるされない。作者としては、たとへばこの「私」か踊子かの質問のやうなのは、ていねいな読者の警告あるひは叱正を得たとして、感謝しなければ

ならないだらう。(p.224)

それに対して、(19)の下線部「しかしそうなら」以降は、一種の自己弁護である。そこでは、「うなづいて見せた」のが「踊子」であるという解釈の方が優勢であるという主張を、文法的な観点から行っている。ここで川端が述べている問題は、複文における「は」と「が」のスコープ(作用域)の違いとして知られている¹⁸⁾。例えば、

(21) a. 花子はピアノを弾くと、いつも眠くなる。

b. 花子がピアノを弾くと、いつも眠くなる。

という2つの例文を比べてみると、「いつも眠くなる」の主格動作主になるのは、aでは明らかに「花子」であると理解されるが、bでは「花子の弾くピアノを聞く、花子以外の誰か(おそらくは、表現として顕現していない「私」)」と理解されるのが普通である¹⁹⁾。

川端はさらに、「もう一ぺんただうなづいて見せた」の主格動作主が「踊子」であることを明示するには、(21)の例と同様に、「～と」という接続形式を用いた方が有利であることについても言及している。

(22) 「私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」の「振り返つた時、」を「振り返ると、」に改めると、「振り返つた時、」とあるよりも、その下の主格の省略がやや分りいいかもしれないが、まあ似たもので、やはり「踊子は」と主格を入れた方がはつきりする。(p.225)

試しに、(21)の例文ペアの「～と」を、「～時」に置き換えて、比較してみよう。

(23) a. 花子はピアノを弾く時、いつも眠くなる。

b. 花子がピアノを弾く時、いつも眠くなる。

前の例文(21) bでは、「いつも眠くなる」の主格動作主体が「花子以外の誰か」であるという解釈の方が優勢であったが、(23) bでは、「花子以外の誰か」という解釈は、あまり優勢とは言えない。「～と」を「～時」に変えると、従属句内の動作主解釈の優先度に変化が生じ、解釈上の曖昧性が大きくなってしまふことがわかる。

したがって、(22)で川端が述べている改善策、すなわち、「振り返つた時」を「振り返ると」に変更するという改善策には、確かに一理ありそうである。それでは、実際にその変更を行ってみることにしよう。

(24) 私が繩梯子に捉まらうとして振り返ると、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。

ところが、この(24)は、川端が意図している a の構造ではなく、b の構造として解釈されやすいようである。

(25) a. [私が繩梯子に捉まらうとして振り返ると + [さよならを言はうとしたが + それも止して + もう一ぺんただうなづいて見せた]]。

b. [[私が繩梯子に捉まらうとして振り返ると + さよならを言はうとしたが], [それも止して + もう一ぺんただうなづいて見せた]]。

これでは少し見づらいので、仮に、「私が繩梯子に捉まらうとして振り返ると」をW、「さよならを言はうとしたが」をX、「それも止して」をY、「もう一ぺんただうなづいて見せた」をZとして、節の結合関係を模式的に示すと、次のようになる。(25)の a, b は、(26)の a, b にそれぞれ対応している。

(26) a. [W + [X + Y + Z]]

b. [[W+X]+ [Y+Z]]

南不二男 (1974, 1993) の従属句の分類によれば, Wの「〜と」はB類従属句, Xの「〜が」はC類従属句である。B類従属句は, C類従属句の構成要素となりうるので, Wは即座にXと結合できる([W+X])。したがって, (25)bのような構造解釈が自然な解釈として得られる。それに対して, aでは, B類従属句であるWが, 自分より上位レベルのC類従属句Xを超えて, X・Y・Zが結合するまで保留されることになる。これが, aの構造解釈にいくぶんかの不自然さが伴う原因である。

川端が(22)で, 「やはり『踊子は』と主格を入れた方がはつきりする」と述べていたのは, このあたりの事情も見越してのことであつたに違いない。

5. 結束性と一貫性に関わる「も」

5-1 「も」の同列性解釈と結束性

「さよならを言はうとしたが, それも止して, もう一ぺんただうなづいて見せた」の部分について, 表現としては顕現していない主格動作主をどのように想定すればよいかという問題は, 結束性解釈に属する問題である。川端自身が意図した解釈は, 「踊子」を主格動作主として想定するということであつた。ここまで見てきた川端自身の分析によれば, 川端は, 次のような推論を読み手に期待していたらしいことがわかつた。

(27)a. この文には「もう一ぺんうなづいた」と表現されており, また, 先行文中では「うなづく」という動詞が「踊子」を主格動作主として二度使用されている。こういう事実がある以上, 「もう一ぺん」という表現を契機にすることによって, 想定されるべき主格動作主が「踊子」であるという推論が行われるはずである。

b. 同一文内の「私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時」という従属句には, 「私は」ではなく「私が」と表現されている。こういう事実がある以上, この「私が」という表現を契機にすることによって, 主節の主格動作主が「私」以外の者であるという推論が行われるはずである。

文境界を超えた位置にあるコテキストとの参照関係や照応関係が問題となるような結束性解釈にあつても, まずは, その文の語彙統語構造のありかたが問題にされなくてはならないということ, (27)は示している。

そういう観点に立てば, (1)の下線部には, (27)で問題にされている表現以外にも, 結束性や一貫性に関わっている表現がある。「それも止して」の「も」がそれである²⁰⁾。

この「も」には, 「(それ以外のことをしなかったのと同様に) それも止して」という同列性解釈と, 「(せめてそれくらいはするはずなのに) それ(さえ)も止して」という譲歩性解釈とが想定可能である²¹⁾。

この場合, 「それ」の指示対象は, 「(踊子が私に) さよならを言うこと」とであると理解される。したがって, 同列性解釈の場合は, 「<さよならを言う> 以外のこと」で「踊子」がしなかつたこととして, 何が想定できるのかが問題となる。コテキストから得られた文脈想定の中に, この推論に利用可能な情報が見いだされる場合, 「も」の同列性解釈によって結束性が顕在化する。例えば, (12)に引用した部分で, 「踊子」は, 「私」が傍らに近づいてもただ「黙つて頭を下げた」

だけであった。また、(17)に引用した部分では、二人きりのとき「私」が「いろいろ話しかけて見た」にも関わらず、「踊子」は「堀割が海に入るところをじつと見下したまま一言も言はなかつた」。「うなづいて見せるだけだつた」のである。これらの先行表現は、「それも止して」の「も」に、同列性解釈の文脈を与えるのに十分であろう。「踊子」は、それまで黙って一言も言わなかったのと同様に、さよならを言うことも止したのである。

5-2 「も」の譲歩性解釈と一貫性

一方、「も」の譲歩性解釈の場合は、

(28) なぜ、「さよならくらいは言うはずだ」という判断を譲歩性解釈の前提にすることができるのか。

という問で示されるような、やや高い次元での推論が必要になってくる。コテキストから得られた文脈情報の中に、この推論に利用することができる情報が見いだされる場合、「も」の譲歩性解釈によって結束性が顕在化することになると言ってもよいであろうが、しかし、それはもはや結束性解釈にとどまるものではなく、むしろ一貫性解釈と強く結びついたものになるはずである。というのも、この(28)の推論の先には、次のような問で示すことができるような、さらに一歩先に進めた推論が待ち受けているからである。

(29) さよならくらいは言うはずなのに、なぜさよならを言うことさえも止してしまったのか。

このような推論を行うためには、「私」と「踊子」たち旅芸人一行がどういう付き合い方をしていたか、また、「私」と「踊子」がどういう心理的關係にあったか、ということに関する文脈情報を、総合的にたぐり寄せる必要がある。

例えば、「私」が旅芸人一行と一緒に下田街道を歩いているとき、連れの芸人に「私」のことを「いい人ね。」「ほんとにいい人。いい人はいいね。」と話していた踊り子のようす。あるいは、「私」が次の日には「船で東京に帰らなければならない」ということを旅芸人一行に告げた日の夕刻、「活動につれて行つて下さいね」というかねてからの願いも、「おふくろ」の反対に遭って結局かなえられなかった「踊子」の、「私が言葉を掛けかねた程によそそしい風」で、「顔を見上げて私を見る気力もなさそうだつた」、そのようす。

(28)や(29)のような推論を進めるためには、こういう文脈情報をたぐり寄せ、しかも、矛盾なくまとめあげていく作業が必要である。その途上では、表現面には明記されていないさまざまな想定を補う作業も不可欠であろう。こういう作業が、「伊豆の踊子」という小説作品全体に及ぶグローバルな一貫性解釈と深く関わっていることは言うまでもない。

6. 結束性と一貫性のせめぎ合い

6-1 別エピソード挿入による影響

(1)に引用した「伊豆の踊子」の一節のうち、「私が縄梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。」という一文について、川端康成自身による分析に基づきながら、この文が、結束性解釈から一貫性解釈にまで及ぶ解釈問題を内在させていることを見てきた。

しかし、よくわからないことがある。この表現には、結束性を川端の意図通りに実現するた

めの仕組みが幾通りか用意されていた。しかも、先行位置に置かれた表現もその結束性解釈を支えるのに必要な文脈情報を提供していた。それにも関わらず、なぜ、主格動作主の想定に曖昧性が生じてしまうのか。

一つの原因として考えられるのは、別エピソードの挿入である。(17の後半部分を a, (1)を b として、次に再掲する。

(30) a. 栄吉が船の切符とはしけ券とを買ひに行つた間に、私はいろいろ話しかけて見たが、踊子は堀割が海に入るところをじつと見下したまま一言も言はなかつた。私の言葉が終らない先き終らない先きに、何度となくこくりこくりうなづいて見せるだけだつた。

b. はしけはひどく揺れた。踊子はやはり唇をきつと閉ちたまま一方を見つめてみた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。はしけが帰つて行つた。

このように a と b が連続していたならば、おそらく、下線部の主格動作主の想定の方が問題となる恐れは少なかったはずである。しかし、実際には、a と b の間には、新潮社の35巻本全集の版組みで15行（1頁弱）の隔りがある。その間には、「土方風の男」から乳幼児3人を連れた「婆さん」を上野駅へ行く電車に乗せるまで世話してほしいという依頼を受けるというエピソードが挿入されている。このエピソードが障害となっているために、(30) b の下線部を解釈する際に必要な文脈情報が保持できず、結果として川端の意図した結束性解釈につながらなかったのではないか。そのような考え方も十分可能であるように思われる。

6-2 「語りの視点」の不整合性

しかし、川端は、『伊豆の踊子』の作者の中で、もっと重要な指摘を行っている。それは、(30) b の下線部自体が、この作品全体の一貫性と深い関わりをもっているという見方である。

前述したように、川端は、「踊子といふ主格を省略したために、読者をまどはせるあいまいな文章となつた」という点を自ら認め、また、「やはり『踊子は』と主格を入れた方がはつきりする」と述べていた。しかし、実際には川端はその改筆を行わなかった。この点について、川端は次のように述べている。

(31) 「伊豆の踊子」は近年もいろいろの形で新版が出たが、私はその主格を省略したまま通した。主格を入れる入れないの部分が、気をつけて読むと、不用意な粗悪な文章だからである。主格を補ふだけではすまなくて、そこを書き直さねばならぬやうに思へるからである。(p.225)

いったいどういう点が「不用意」で「粗悪」だというのか。ここで、川端は、いわゆる「語りの視点」にまつわる不整合性を自ら指摘する。

(32) 「伊豆の踊子」はすべて「私」が見た風を書いてあつて、踊子の心理や感情も、私が見聞きした踊子のしぐさや表情や会話だけで書いてあつて、踊子の側からはなに一つ書いてない。したがつて、「(踊子は) さよならを言はうとしたが、それも止して、」と、ここだけ踊子側から書いてあるのは、全体をやぶる表現である。(p.225)

確かに、「さよならを言はうとしたが、それも止して」という表現では、この部分に想定される主格動作主の内面が一人称的に描写されていることになりそうである。この点について、川端は次のような的確な分析をしている。

(33) 踊子がなにか言ひさうにしたらしいが、それが「さよなら」といふ言葉であつたかどうか

かは、「私」にはわからない。あるひは、ここの「さよなら」はただなにか別れのあいさつの言葉といふ意味であつたにしても、「言はうとしたが、」は、「私」が見た書き方ではない。「それも止して、」もよくない²²⁾。(p.225)

(32)で、川端は「全体をやぶる表現」という言い方をしていたが、裏を返せば、「伊豆の踊子」は、「『私』が見た風に書」くという「語りの視点」を、全篇を通して一貫させるべきであったというのが、小説作家としての川端の反省的自覚であったことがわかる。川端自身が「全体」という言葉を使っていることから明らかなように、川端は、間違いなく小説作品「伊豆の踊子」全体の一貫性解釈に言及しようとしている。

6-3 解釈姿勢と最適関連性

ここで川端が指摘している問題こそが、「さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」という部分の主格動作主を想定する解釈処理に、決定的な影響を与えていると私は見る。読み手は、この小説作品の冒頭から末尾まで、「私」に同化し、「私」に感情移入し、いわば「私」になりきって解釈処理を続けているはずである。それが読み手の解釈処理の基本的な枠組みとなっている。それが、小説のいよいよ最後近くに至って、たった一箇所だけ、語彙統語構造に表れた結束性の手がかりに従う限りにおいて、「私」以外の人物と同化した視点で語られたと解釈できる部分が混入している。このとき、読み手が無視したり、暫定的にキャンセルしたりするのは、はたして結束性解釈の方であろうか、それとも、一貫性解釈の方であろうか。

実はこの間に対して黒白をつけることは、簡単にはできそうにない。関連性理論に従う限り、読み手は、最適関連性²³⁾を有する解釈を自ずと求めることになるからである。つまり、その解釈は、読み手が注意を払うだけの価値をもった文脈効果を発揮し、かつ、不当な労力負担が必要とされていないものでなければならない。問題は、得られる文脈効果と、負担しなくてはならない処理労力のバランスである。丹念に精密な解釈を行う専門家は、処理労力を多めに支払う代わりに、その代償として、それに見合うだけの文脈効果を達成するだろうが、ほんの時間つぶしに流し読みをするような場合には、細部の精密な解釈に処理労力をかけたりはしないものである。

川端は、(22)で「翻訳の場合とか学習の場合とかは、一語一語をゆるがせにしないで確かめてゆき、もちろん、主格のあやふやなどはゆるされない。」と述べていた。これは、専門家による丹念で精密な解釈の場合である。そして、特徴的には、このような場合に、「さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」の部分の主格動作主の想定の仕事が問題になっていたわけである。だとするならば、この部分の表現は、読み手の解釈姿勢によって、最適関連性を有する解釈に差が生じるような特性をもっていることになる。

その原因となっているのが、「語りの視点」の不整合性であるというのが、小論の結論である。川端が犯した不用意な視点転換は、そのことに注意を向けることができるだけの認知能力をもつ読み手にとっては、重大な解釈問題として顕在化され、その労力を支払っただけの代償効果が追求される。しかし、そうでない大多数の通常の読み手にとってみれば、この部分の表現がイレギュラーであるということ自体にも気づかないかもしれないのである。

注

- 1) 本文ならびに掲出頁は、『川端康成全集 第2巻』(新潮社, 1980年)によった。「伊豆の踊子」からの引用については以下同様。巻末の「解題」によれば、「伊豆の踊子」は、『文藝時代』の1926年1月号(題「伊豆の踊子」)と2月号(題「続伊豆の踊子」)に分けて発表された後、1927年に両者を併せて一編とした上で短編集『伊豆の踊子』(金星堂)に収められた。なお、小論では、川端康成の文章を引用するに際し、仮名遣いはそのままとしたが、漢字は新字体に直した。
- 2) 訳文と掲出頁は、川端康成〔原作〕、E.サイデンステッカー〔ほか訳〕『英和対照 伊豆の踊子』(原書房, 1981年)によった。この翻訳の初出は、*The Atlantic Monthly* No.1(1955年1月)。
- 3) 「文脈 (context)」という用語は、Sperber and Wilson (1986) の関連性理論での用法に従って最広義に用いる。すなわち、文脈とは、聞き手が発話解釈を行う際に利用可能な、話し手との共有情報や聞き手に特有な情報のすべてを含む想定集合である (Wilson 1994 : 41)。
- 4) Halliday and Hasan (1989 : 48) では、「一貫性 (coherence)」を用いてテキストを規定している。「テキストは、一貫性によって特徴づけられるものであり、すなわち、内容のまとまりがあるものである」。なお、Halliday and Hasan (1976) では、英語の結束関係として「指示」「省略と代用」「接続」「語彙的結束」の4種を挙げて、記述・説明を行っている。
- 5) 結束性と一貫性の区別に関する議論は多いが、その中でも、Widdowson (1979 : 87) のアイデアは有名である。それによれば、結束性は、「形式的要素としての文をつなぐ、表現構造に現れた結びつき」であり、「命題的な関係 (propositional relation)」とされる。それに対して、一貫性は、「文によって遂行しようとしている伝達行為の間の結びつき」であり、「談話の部分間の発話内的な関係 (illocutional relation)」であるとされる。
- 6) このあと、次のように続く。「両者は語源的に関係しており、同じ動詞形 *cohere* を共有している。しかし、両者に有効な区別があることは、*coherent* と *cohesive* という派生形容詞の差によって示されており、たとえ共通の用法があるとしても、両者は異なった意味をもっていると言える。」
- 7) ‘*cohesion*’ 第4項めには、「文章や談話の断片が意味的なまとまりを持っていること；Halliday の用語」という解説が加えられている。また、‘*coherence*’ 第5項めでは、「(文章や談話における表現・内容の) 一貫性」というように補説されている。
- 8) 『テキスト言語学入門』の筆頭訳者である池上嘉彦氏は、この邦訳書が出版された1984年の前年に公表した池上 (1983) においては、「結束性」を ‘*cohesion*’ の訳語として使用している。
- 9) Blakemore (1992) の邦訳書である『ひとは発話をどう理解するか』(ひつじ書房, 1994年)では、‘*cohesion*’ に「結束作用」、‘*coherence*’ に「首尾一貫性」という訳語を当てている。
- 10) 言語学用語というのは(いや、どのみち専門用語というものは)、少なからずそういう側面を持ち合わせていると言えるかもしれない。
- 11) 表意と推意の区別、ならびに、関連性理論の基本的な考え方については、その概略を高本

- (1994 a, 1995 a, 1996a-d) に述べているので、そちらを参照されたい。
- 12) 「道がつつら折りになつて、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追つて来た。」(p.295)
 - 13) いわゆる「言語文脈」のことで、ある発話形式の前後に連続している別の発話形式群のことを指す。「文脈 (context)」とは区別して用いる。
 - 14) 長田久男 (1984) は、「連文」を「意義の繋がりをを持った二つ以上の文の連続体」(p.15) と規定し、「連文は、『意義の統一』という点が問題とされなくて『意義の繋がり』という点が顕現する」(p.7) と述べている。小論もこれに従う。つまり、任意の文連続が連文か否かを決定する条件は、結束性の有無のみであって、一貫性の有無は考慮されないということである。
 - 15) Carter (1993: 9) による「一貫性」の定義は、テキスト全体の主題との整合性に言及している。「あるテキストが、聞き手や読み手に十分納得がゆくものであるためには、単に文の間に適切な文法的つながり (結束性) があるのみならず、概念・命題・事象が互いに関係づけられ、そのテキストの全体にわたる主題と整合性をもっている必要がある。このような意味的で命題的な組織性を一貫性と呼ぶ」。また、ここで Carter は、結束性があるからといって必ずしも一貫性があるとは限らないという点を指摘している。このような見方は、「結束性に対する一貫性の優位」としてしばしば議論されてきた (Dijk 1977, Widdowson 1978, Edmondson 1981, Canale 1983, Yule 1985, Shiffrin 1987, Cook 1989, McCarthy 1991)。この問題については、別の機会に論じたいと思う。
 - 16) 『川端康成全集 第33巻』(新潮社, 1982年) によった。引用末尾に掲げる頁数も、これに従う。なお、巻末の「解題」によれば、『伊豆の踊子』の作者は、雑誌『風景』1967年5月号～1968年11月号まで19回にわたって連載された。その6回目と7回目に、(1)に掲げた文の解釈にまつわる問題への言及がある。
 - 17) 『伊豆の踊子』の作者の中で、川端は、「伊豆の踊子」終章で相前後して3回使用した「うなづく」という動詞について、1回目、2回目、3回目の「うなづく」には微妙な違いがあるという自解を行っている (pp.227-8)。
 - 18) 複文における「は」と「が」のスコープの違いについては、野田尚史 (1986) を参照。
 - 19) ㉑) bの「が」に音声上の卓立をほどこして、この「が」をいわゆる「総記」の「が」として積極的に解釈する場合は、「いつも眠くなる」の主格動作主についても「花子」という解釈が可能である。
 - 20) 「ただうなづいて見せた」の「ただ」についても、結束性と関わっていると見ることができ。「ただうなづいて見せた」という表現は、「うなづいて見せるだけだった」とパラフレーズすることができる。これは、(17)の「何度となくこくりこくりうなづいて見せるだけだつた」という表現とよく符合している。
 - 21) 助詞「も」を契機とする同列性解釈と譲歩性解釈については、高本 (1996 a) 参照。同列性解釈と譲歩性解釈とは、互いに排除しあうことはないが、通常は関連性の原理を満足する最初の解釈が採られるので、どちらかの解釈に傾斜する。
 - 22) (4)のサイデンステッカーの英訳では、「それも止して、」に対応する部分が省かれている。川端は、それは「訳者の眼であつて、私もそれに教へられた」と述べ、「それも止して、」という表現は、「よくないし、よけいのやうであり、「やはり蛇足のやうである」としてゐる。また、「うなづいて見せた」の「見せた」についても「をかしい」と述べている。(いずれも、p.226)

- 23) 関連性理論に基づく語用論的な基準と、用語の詳細については、Sperber and Wilson (1986, 1995), Blakemore (1992), Wilson (1995) を参照されたい。

参 考 文 献

- 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」, 国立国語研究所『談話の研究と教育 I』(日本語教育指導参考書41), 大蔵省印刷局。
- 高本條治 (1991 a) 「叙述内容が担う消極的な連文機能 (一) 一述語の連文機能の継承」, 学苑 615。
- (1991b) 「顕現していない格成分の解釈について—連文における解釈の場合」, 日本語と日本文学14。
- (1994 a) 「何が旅ごころを誘うのか—JR 広告コピーの語用論的分析」, 学苑650。
- (1994 b) 「『おはなが ながいのね』の解釈—まど・みちお『ぞうさん』の語用論的分析」, 『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』, 三省堂。
- (1995 a) 「カワセミは飛んでいるのか?—川端茅舎句『翡翠の影こんこんと溯り』の語用論的分析」, 上越教育大学研究紀要14-2。
- (1996 a) 「取り立て助詞『も』を契機とする同列性解釈と譲歩性解釈」, 上越教育大学国語研究10。
- (1996 b) 「蟬がなきだすとお礼が口をつく事情—柳句『せみがなき出すとお世話に成ました』の語用論的分析」, 岡山大学国語研究10。
- (1996 c) 「いわゆる『ウナギ文』発話の表意解釈とその記録形式」, 国語学184。
- (1996 d) 「『窓』をとおして見えるもの—『枕草子』における『窓』用例の語用論的性格」, 上越教育大学研究紀要16-1。
- 長田久男 (1984) 『国語連文論』, 和泉書院
- 野田尚史 (1986) 「複文における『は』と『が』の係り方」, 日本語学5-2, 明治書院。
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』, くろしお出版。
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店。
- (1993) 『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店。
- Beaugrande, R. and W. Dressler. 1981. *Introduction to Text Linguistics*. Longman. [池上嘉彦〔ほか訳〕『テキスト言語学入門』(紀伊国屋書店, 1984年)]
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances : An Introduction to Pragmatics*. Blackwell. [武内道子〔ほか訳〕『ひとは発話をどう理解するか』(ひつじ書房, 1994年)]
- Brass, R. 1990. *Relevance Relations in Discourse : A study with special reference to Sissala*. Cambridge University Press.
- Bussmann, H. 1996. *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. Trans. and eds. G. Trauth and K. Kazzazi. Routledge.
- Canale, M. 1983. 'From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy'. In J. C. Richards and R. W. Schmidt (eds.) *Language and Communication*. Longman.
- Carter, R. 1993. *Introducing Applied Linguistics : An A-Z Guide*. Penguin English.

- Cook, G. 1989. *Discourse*. Oxford University Press.
- Crystal, D. 1991. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. Third Edition. Blackwell.
- 1992. *An Encyclopedic Dictionary of Language and Languages*. Penguin Books.
- Dijk, T. A. van. 1977. *Text and Context : Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse*. Longman.
- Edmondson, W. 1981. *Spoken Discourse : A Model for Analysis*. Longman.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. Longman.
- 1989. *Language, Context, and Text : Aspects of Language in a Social-semiotic Perspective*. Oxford University Press. [寛寿雄 (訳) 『機能文法のすすめ』(大修館書店, 1991年) : 邦訳は1985年 Deakin University 刊の初版による]
- Lyons, J. 1995. *Linguistic Semantics : An Introduction*. Cambridge University Press.
- McCarthy, M. 1991. *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge University Press. Longman.
- Richards, J. C., Platt J. and Platt H. 1992. *Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics. Second Edition*. Longman.
- Shiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance : Communication and Cognition*. Blackwell. [内田聖二 (ほか訳) 『関連性理論—伝達と認知』(研究社出版, 1993年)]
- 1995. 'Postface'. In *Relevance : Communication and Cognition*. Second Edition. Blackwell.
- Tannen, D. (ed.) 1984. *Coherence in Spoken and Written Discourse*. Ablex Publishing.
- Wales, K. 1989. *A Dictionary of Stylistics*. Longman.
- Widdowson, H. G. 1978. *Teaching Language as Communication*. Oxford University Press.
- 1979. *Explorations in Applied Linguistics*. Oxford University Press.
- Wilson, D. 1994. 'Relevance and Understanding'. In G. Brown, K. Malmkjaer, A. Pollit and J. Williams (eds.) *Language and Understanding*. Oxford University Press.
- Yule, G. 1985. *The Study of Language*. Cambridge University Press. [今井邦彦 (ほか訳) 『現代言語学20章』(大修館書店, 1987年)]

The Person who Only Nodded.
A Pragmatic Analysis of *The Izu Dancer* by Yasunari Kawabata.

Joji TAKAMOTO*

ABSTRACT

In *Izu no Odoriko* (*The Izu Dancer*) written by Yasunari Kawabata, there is a sentence whose covert subject is interpretively ambiguous. This interesting case of interpretation involves several pragmatic problems related with both 'cohesion' and 'coherence'.

In this paper, first, I gave an overview in terms of the distinction between 'cohesion' and 'coherence', as well as the definitions of each two terms. After that, using the essay work in which Yasunari Kawabata himself wrote about his own intended interpretation, I look at these problems from the viewpoint as follows :

- (i) how cohesion and coherence restrict each other,
- (ii) how cohesion and coherence cooperate with each other, and
- (iii) how cohesion and coherence conflict with each other.

* Division of Language, Department of Japanese Language